

---

# 発達理論の学び舎

Back Number: Vol 182

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」

---



---

## 目次

- 3621. キャリアカウンセリングのテキストを眺めて:より精確な地図を自ら作ること
- 3622. 現代社会の狂気と熱狂:成人発達理論やインテグラル理論に対する人々の態度より
- 3623. 醒めた目を持つことの大切さ
- 3624. 不思議なコインゲームとサッカー関係者の理論化能力が極めて低いことを嘆く監督と話す夢
- 3625. 作曲上の異質性:体現されたインテグラル理論を捉え直す試みの始まり
- 3626. ソーシャルメディアとヒロポン
- 3627. 奇妙さの中にある美と逆向きの狂気
- 3628. 今回インテグラル理論を紹介することの危惧
- 3629. ドルナッハの精神科学自由大学:音・色・意識・エネルギーの探究に向けて
- 3630. グルジェフが登場する劇に関する夢
- 3631. 竜の背中に乗る夢
- 3632. 親友とのやり取りとマイクロソフトの筆頭株主に関する夢
- 3633. インテグラル理論を紹介するにあたって
- 3634. 不可逆な時の螺旋の中で
- 3635. 成人発達理論やインテグラル理論を学ぶ際に求められる「醒めの体験」
- 3636. 発達に対する淡い期待と「発達のマゾヒズム」
- 3637. 今朝方の夢
- 3638. 現代の諸々の技術との向き合い方について
- 3639. 小鳥の清澄な鳴き声から
- 3640. 成人発達理論やインテグラル理論に対する消費的態度に関して

---

### 3621. キャリアカウンセリングのテキストを眺めて:より精確な地図を自ら作ること

時刻は午後の八時に近づきつつある。先ほど夕食を取り終え、これからゆっくりと、一日を締めくくる活動に従事していく。

今日は一日を通して快晴であり、夕方、白いうろこ雲が空に浮かんでいて、夕日がそれを美しく照らしている光景が目にとまった。暮れ行く夕日の色彩の変化に応じて、うろこ雲の色彩も変化する様子はとても美しかった。また、うろこ雲の上には飛行機雲が出来ており、それは竜の背中に乗っているかのようであった。

今日の午後、現在協働させていただいているある企業の方から、キャリアコンサルタントのテキストを七冊送っていただいた。今年の春頃から初夏にかけて、キャリアコンサルタント養成に向けたテキストの中に、成人発達理論の論点を盛り込んでいくことになっている。テキストが届けられてすぐに中身をざっと確認してみたところ、当然ながら、私が知らない事柄がいくつもあり、非常に面白い内容だと思った。特にキャリアコンサルティングという職業が成立した背景や意義、キャリアカウンセリングに活用されている理論など、テキストの記述は非常に興味深い。私がこのテキストに執筆をしていくのはまだ先であり、それまでの間に七冊のテキストの内容全てに目を通しておこうと思う。

キャリアカウンセリングの理論に関するテキストを読みながら気付いていたのは、未だ民間資格に留まっているコーチングと比べて、キャリアカウンセリングは理論をしっかり学ぶことが要求されているということだった。そのことに対して随分と好感を持った。

今日はこれから、本日最後の作曲実践をした後に、これらのテキストを読み進めていきたい。今日もウィルバーの書籍の監訳の仕事を進めており、本日は第四章のレビューを行った。これで残りあと三章となる。一日に一章ずつレビューをしていくことが良いペースになっており、毎日充実した形でレビューの仕事に取り掛かることができている。今回監訳している書籍は、過去に何度も読んでいたのだが、改めて翻訳された日本語で読んでみると、いろいろと新たな気づきや発見があるものである。この経験を通じて、翻訳書の意義を考え直すことになったように思う。

本書の中でウィルバーが警鐘を鳴らしているように、いかなる理論もそれが現実世界を映す地図に過ぎないのであるから、地図だけを探究し、実際にその地を訪れることを通じて(実践を通じて)探

---

---

究活動に従事していくことは極めて重要である。今の自分に当てはめて考えると、音楽理論だけを探究しては地図の世界に溺れてしまう。ここで改めて、曲を作るという実践をとにかく優先させ、それを通じて、より精確な地図を自らの手で作っていくことが重要だということに自覚的になろう。まさにウィルバーも、考えられる最も精確な地図を頼りに、実際にその地を訪れ、その地で得られた知見をもとに、地図をより精確なものに書き換えていくことを読者に絶えず促していることを忘れてはならない。フローニンゲン:2019/1/2(水)20:03

### 3622. 現代社会の狂気と熱狂:成人発達理論やインテグラル理論に対する人々の態度より

今日も作曲実践、そしてウィルバーの書籍の監訳の仕事に従事しながら、過去の日記を編集していた。その中で、スウェーデンの哲学者、ニック・ポストロムの言葉に考えさせられるものがあった。ポストロムは、近年巷でよく耳にするようになったAIに関して、人々が手放しにAIを褒め称える—実際には、人間の仕事が奪われるかもしれないなどの危機感を煽る論調もあるが—傾向を批判して、それを“good story bias”と呼んでいる。

これは認知バイアスの一種だが、それを単なる認知上のバイアスだと括って終わりにしてはならないように思う。なぜなら、現代人は、形を変えて、これに類する実に様々なバイアスを抱えているように思うからだ。それはAIのような事物のみならず、例えば、近年注目を集めている成人発達理論や、現在監訳中の書籍の著者ケン・ウィルバーが提唱したインテグラル理論など、何か目新しい理論に対しても当てはまる事柄だろう。

成人発達理論にせよ、インテグラル理論にせよ、確かにその理論体系は堅牢であり、それらが人間の発達現象を深く扱っているという性質上、多くの人にとって魅力的な理論に映るのは理解ができる。しかし、彼らは、それらの理論をあまりにも無防備に、そして手放しに称賛する傾向があるように思えて仕方ない。

数日前の日記にも書き留めていたが、そうした人々は、諸々の事物に対して覚めた目を持っていないように思う。あまりにも諸々の事物と一体化しており、適度な距離が保てていないのだ。成人発達理論やインテグラル理論に関しても同様で、どこか藁にもすがるような思いでそれらの理論に救済を求めたり、あまりにも熱烈にそれらの理論を信奉しようとするのは、実はそれらの理論が真に言わんとしていることとは真逆のことであることに気づく必要があるように思う。もう少し醒めた目を持

---

ち、ある意味くつろいだ形で諸々の事物に接することが重要なのではないだろうか。相も変わらず現代社会は、狂気と熱狂に取り憑かれている。

現在監訳中の書籍に再び言及すると、今回翻訳を担当してくださった知人の方の翻訳は実に素晴らしく、今回八年越しに協働することができてとても嬉しく思う。私の知人であるインテグラル・ジャパンの鈴木規夫さんも私も翻訳者ではないため、その方が翻訳を通じて行う貢献は多大なものがあるように思う。

ケン・ウィルバーの書籍の翻訳に関しては、過去に松永太郎氏など、実に素晴らしい翻訳家の方がいらっしやったが、現在においては、私の知人であるその翻訳家の方が、ウィルバーの書籍を翻訳する最も優れた翻訳者であるように思う。明日もその方が翻訳した原稿を読むことが楽しみである。明日は第五章の翻訳をレビューし、明々後日には全てのレビューが完成する。その後、監訳者として「はじめに」と巻末の解説を執筆しようと思う。フローニンゲン:2019/1/2(水)20:26

### 3623. 醒めた目を持つことの大切さ

時刻は七時を迎えた。今朝は五時半に一度目を覚ましたが、そこで起床することはなく、六時半に起床した。これからゆつくりと一日の活動を始めていきたい。今日もまた、現在監訳中のウィルバーの書籍の翻訳をレビューして行こうと思う。本日は全七章のうちの、第五章をレビューする。この章は、インテグラル理論が実際にどのような実務領域でいかように活用されているのかを紹介している章であり、実務家の方たちにとっては一番気になる章だと思う。

昨夜就寝に向かおうとしている時に、今回の監訳書の「はじめに」ないしは巻末の解説として執筆する文章に関してまた一つアイデアが浮かんだ。本書を通じてウィルバーは、発達が一概に善なるものではないことに警鐘を鳴らしている。確かにウィルバーは、語りの場では時に発達の取り扱いに関して少々雑な発言をしてしまうことがあるが、書籍の中では非常に落ち着きがあり、そして洞察に溢れた形で発達現象を取り扱っている。

私の知る限りでは、発達現象の取り扱いに関して最も洞察に溢れる指摘をしているのは哲学者のザカリー・スタインだと思うが、スタインが指摘するように、発達という現象にあまり熱狂しすぎないように制するような発言が今回の書籍の中にも見られることは喜ばしい。ただでさえ、大きければ大きい

---

ほど良いという思想や量の拡大を盲目的に希求する思想がはびこる現代社会の中で、発達を煽るような発言は控えるべきだろう。発達とは究極的には、「醒めのプロセス」なのだから、発達という現象そのものに対しても醒めた目―「冷めた目」ではなく―を通じて見ることができなければならないだろう。そのようなことを昨夜の就寝前に考えていた。

今日はこれから、いつものように作曲実践をまず行う。早朝の作曲実践は、毎回バッハの四声のコラールを参考にしていたが、昨日二回ほどコラールを参考にしていたので、今朝はモーツァルトの変奏曲に範を求めようと思う。コラールに関しては、四声あるということもあり、主にハーモニーに対する工夫をする場となっているが、人間が歌うことを目的にしたコラールという都合上、歌えないようなリズムを作ることができないという制約があり、リズムへの工夫が少々難しいことがある。バッハはそのあたりについても見事な工夫をしているのだが、私の場合は、こうしたコラールをピアノ曲として作っているため、もう少しリズムに関しては工夫した方がいいだろう。これからモーツァルトの曲に範を求めようとしているのは、まさにモーツァルトはリズム感に優れており、決して私が思いつかないようなリズムで曲を作っていることが多いからである。早朝の作曲実践では、モーツァルトのリズムからいろいろと学んでいこうと思う。

昨日の夕方に、十二音技法に関する二冊の書籍“Serialism: Cambridge Introductions to Music (2008)”と“Serial Music, Serial Aesthetics: Compositional Theory in Post-War Europe (2008)”をアマゾンを経由してイギリスの書店に注文した。どちらもケンブリッジ大学出版から出版されていることもあり、かなり高度な内容だと思うが、目次を見る限りでは非常に興味深い内容となっており、二冊の書籍の到着が今から楽しみだ。フローニンゲン:2019/1/3(木)07:28

#### No.1538: Destructive Agony of Heroes

In this modern world, all heroes become destructive, and still, they have agony. The darkness of night tells me so. Groningen, 21:07, Thursday, 1/3/2019

#### 3624. 不思議なコインゲームとサッカー関係者の理論化能力が極めて低いことを嘆く監督と話す夢

時刻は七時半を迎えた。辺りは闇に包まれているが、遠くの方で一台の車がヘッドライトをピカピカと灯しながら道端に停まっている姿が見える。

---

今朝方もいくつか印象に残る夢を見ていた。夢の中で私は、誰もいないセミナールームの中にいた。どうやら今は休憩中のようにあり、これからセミナーが始まり、講師の一人として私も何かを話す予定になっていた。皆が休憩中の間に、機器を確認しておこうと思ったため、私は壇上の機器をいじっていた。

私のパソコンと機器を接続した瞬間に、普段私が用いている作曲ソフトの画面がスクリーン上に映し出された。休憩が終わるまでまだ時間があったので、私はスクリーン上に映し出されていることを気にせず、そのまま曲を作り始めた。すると、休憩を終えて何人かの人たちが部屋に戻ってきた。彼らは皆外国人であり、その中の小柄な一人の男性が何か寂しげな表情をしている。私はそれが少し気になり、彼らの話の輪の中に入っていった。

すると、どうやらその男性は、5ドルの食べ物を購入するカネがないとのことであった。無一文というわけではなく、たまたまその時に小銭がないようだった。そこで周りの人たちが彼に小銭をあげていたが、それでもあと80セント足りないようだった。すると、一人の女性が話の輪の中に入ってきて、「それじゃあ、私とゲームをして、あなたが勝ったら80セントあげるわよ」と提案をしてきた。どのようなゲームが始まるのかと思っていた矢先に、お金の足りない男性は、目の前の目覚まし時計のような時計のスイッチを押し、コインを投げたあとに、「しまったあ〜」と残念そうな表情で述べた。

それを見た女性は、ゲームに勝ったという確信をすでに持っているかのような笑みを浮かべており、余裕のある態度で、その時計の頭のスイッチを押し、コインを投げた。私はそこで何が起こっているのか一瞬理解に苦しんだが、どうやらその男性は慌てて時計のスイッチを早く押してしまったようであり、その瞬間に彼の負けが決定していたようなのだ。

ゲームに負けてしまった男性は、またしても寂しそうな表情を浮かべていた。それを見た私は、そういえば自分の財布には80セントがあったような気がした。財布の中身を確認すると、複数の小銭を組み合わせ80セントになった。実際には、小銭の1ドルが財布に入っていたのだが、私は80セントきっかりを彼に渡した。彼はとても嬉しそうな表情を浮かべ、私にお礼を述べた。そこで夢の場面が変わった。

---

次の夢の場面では、ある日本のサッカーチームの監督と話をしていた。二人で対談をするテレビ番組の収録が終わり、楽屋でその監督とサッカーに関するざっくばらんな話をしていた。その監督は、私が幼少の頃に日本代表で活躍していた選手であり、好きな選手の一人であった。監督としてはまだ若い、私はその監督に大きな期待を寄せていた。

**監督:**「うちの試合見てる？」

**私:**「ええ、見てますよ。試合だけではなく、ローカルの番組を通じて、選手たちが普段見せない顔についても知ってますよ」

**監督:**「あの番組見てるんだ、有り難いね。いや、さっきも話したけど、理論化をただけじゃあ、本当に不十分だよ。そもそもサッカーに携わる人間たちの理論化は杜撰でさあ。困ったもんだよ」

選手時代からそうであったが、その監督はサッカーに関する知性が高く、どうやら今のサッカー関係者たちの理論化能力が極めて低いことを嘆いているようだった。私もその点には大いに共感しているので、共感の言葉とその問題に対する改善案を述べようとしたところで夢の場面が変わった。

フローニンゲン:2019/1/3(木)07:56

### 3625. 作曲上の異質性: 体現されたインテグラル理論を捉え直す試みの始まり

時刻は午前八時に近づき、空がダークブルーに変わり始めた。気がつかないうちに、最も日照時間の短い時期が過ぎ、再び日の出の時間が早くなり始めているようだ。もちろん、午前八時の段階ではほぼ真っ暗だと言えるが、それでも以前よりは、空がダークブルーに変わるのが早くなっている。これまでよりも数十分ほど早いのではないかと思う。

これから、モーツァルトの変奏曲に範を求めて作曲をする。数日前にこれから参考にする曲の楽譜を眺めた時、構造としては複雑ではないのだが、それを参考にすることを一瞬敬遠してしまうような感覚が生まれた。その感覚の正体を探ってみると、モーツァルトのように、めまぐるしく短い音と長い音を活用していくことに躊躇する気持ちがあるようだ。なぜそれに躊躇しているのかというと、自分の中には、平穏な波を期待するような心が絶えずあるからかもしれない。いずれにせよ、今の自分の

---

感覚にとって異質なものを積極的に取り入れていくことにする。それは人間発達の要諦の一つであり、作曲技術の向上においてもまさに当てはまる事柄だ。

その曲にはトリルが随所に、しかも連続して何度も活用されている。トリルという演奏技法を初めて知ったのは、バッハの曲を参考にした時だったと思うが、当時はこの技法をどのように自分の曲の中に活用していけばいいのかわからなかった。今でもトリルの使いどころと使い方は悩むため、そうしたことも、これから参考にしようとしている曲に対して躊躇させたのかもしれない。いずれにせよ、そうした躊躇の気持ちを引き起こさせるものこそが、今の自分の作曲技術にとって異質な存在なのだから、それと向き合うことを通じて技術を磨いていく必要がある。

「すでにこの曲のパターンは見たことがある」という既視感だけを引き起こす曲をいくら参考にしても、自分の作曲技術は高まっていかなさそう。自分にとって未知なパターンを持つ曲を積極的に参考にしていくようにする。それを愚直に続ける中で、絶えず新たな学びを得、無数の実験を自らに課していくことが、いつか自由自在に曲を書ける境地に自分を至らせてくれるだろう。

日記を書き留めているわずかな数分間の間にも、空の色が変化していることに気づいた。見ると、東の空がゆっくりとだが確実に明けてきているのがわかる。近くで小鳥が「ピピッ」と鳴く声が聞こえた。

相変わらず、絶えず様々な思念が自分の中に浮かんでくる。書ける範囲の事柄、そして書かれることを望まれる事柄は全て文章の形にしていく。

現在監訳中のウィルバーの書籍の翻訳を、毎日一章ずつレビューしていることはこれまで述べてきた。ウィルバーが提唱したインテグラル理論は自分の中ですでに無意識的なOSとして機能しているためか、ここ数年間、インテグラル理論について何か考えることや日記の中で言及することはあまりなかったように思う。インテグラル理論をテーマにしたことを考えることはおろか、ここ数年間は、ウィルバーの書籍に関しても、八年前から六年前にかけてジョン・エフ・ケネディ大学に留学していた時ほどには熱心に読んでいないように思う。とはいえ、“The Religion of Tomorrow (2017)”をはじめとして、近年に出版された書籍には一応目を通していったことは確かである。“Integral Meditation: Mindfulness as a Way to Grow Up, Wake Up, and Show Up in Your Life (2015)”という書籍が2015

---

年に出版された時、それが単なる自己啓発書に過ぎないと思って購入を控えていたのだが、偶然にも、昨年九月にボストンを訪れ、街の古書店に足を運んだ時に、その書籍があった。

そこは確かに古書店なのだが、古書だけを扱っているわけではなく、新品の書籍も扱っており、ウィルバーのその書籍は新品だった。それは出版から三年ほど敬遠していた書籍だったのが、中身を確認してみると、随分と面白いことに気づいたのである。特に、第三層の高次の発達段階について、ウィルバーはこれまで以上に説明を加えており、その点が興味深く思えた。もちろん、それらの段階特性については、“The Religion of Tomorrow (2017)”でより詳しく解説されていることをその時知っていたながらも、ボストンのその古書店でその書籍を購入したことをふと思い出した。

その時はまだ、ウィルバーの書籍の監訳の話が正式には来ておらず、その翌月あたりに監訳の話が正式に来たのではないかと思う。これも何かの偶然であり、縁なのだろう。こうした縁のおかげで監訳を引き受けてみると、自分の中で不思議な現象が起こっている。それは、すでに自分の中に体现されているインテグラル理論をもう一度捉え直そうとするような運動が自分の中で起こり始めているというものだ。この機会に、自分の内側にあるインテグラル理論を再度捉え直す試みに従事したいと思う。フローニンゲン:2019/1/3(木)08:24

### 3626. ソーシャルメディアとヒロポン

時刻は昼の12時半を過ぎた。ちょうどつい先ほど昼食を食べ終わり、これから午後の活動に入る。

今日も午前中の活動は充実していた。特に、ケン・ウィルバーの書籍の監訳の仕事は順調に進み、分量の多い第五章のレビューが着実に進んでいる。午後からは過去の日記を少し編集し、その後作曲実践を行う予定であり、夕方から再び監訳の仕事に取り掛かる。

昼食を摂りながら、ソーシャルメディアを活用しなくなったおかげで、諸々の煩わしさから解放され、日々がより充実したものになっていることについて考えを巡らせていた。そうしたことを考えながら窓の外を眺めていると、昭和の初期に強壮剤として売られていた「ヒロポン」について思い出した—私はその時代には生まれていないが。これは、メタンフェタミンを主成分とする覚せい剤の一種であり、現在では使用が禁止されている。当時、ヒロポンを服用して異変を感じた人々がいたのだろうか、1950年代になってそれはすぐに発売禁止となったようだ。

---

私は、数年前にはソーシャルメディアを活用していたが、ある時からその活用の際に違和感を感じるようになった。厳密には、それを活用している時の普段の自分の心の有り様と日々の精神生活の質に対して疑問を抱くようになったのである。そうした疑問を感じるようになってから、私はソーシャルメディアの活用を止め、今も一切のソーシャルメディアを使っていない。現代社会で用いられているソーシャルメディアはどことなくヒロポンのようではないだろうか。

現代人は、どこかソーシャルメディアによってもたらされる刺激に慣れすぎている。慣れすぎているというよりも、そうした刺激がなければ生きていけないような心身が構築されてしまっているように思える。そうした状況が、人々を四六時中ソーシャルメディアを活用することに仕向けているように思えてくる。この人生がソーシャルメディアを活用するためにあるのだと考えるのであれば、それを無配慮に活用するのもわからなくもないが、人々はそのように考えているのだろうか。彼らの生き方を見ている限り、そのような考え方を持っているのだろう。あるいは、そうした考えが浮かばないほどにソーシャルメディアの刺激に埋もれてしまっているのだろう。

ソーシャルメディアが私たちにもたらす刺激について考えていると、それはまるでヒロポンのようだ。端的には、覚せい剤的だと言えるかもしれない。仮に、ソーシャルメディアが人々に精神的な真の目覚めを与えているのであれば、その使用も社会的に意義があるのだろうが、事態は真逆のように思える。あるいは、それは人々を覚醒させるというよりもむしろ、まるで社会的に構築された夢の世界へ人々をさらに深くいざなう睡眠薬のようだ。

この現代社会は本当に奇妙だ。覚せい剤と睡眠薬でまみれた世界に自分たちが生きていることに自覚的になれないというのはなぜなのだろうか。

昨夜も私は違う文脈の中で、「本当に大丈夫ですか？」という言葉で現代人に対して投げかけていた。それについてはまだ日記に書いておらず、単に昨夜、それを独り言としてつぶやいていた。大丈夫なのだろうか？現代人は本当に大丈夫なのだろうか？

「廃人」とは本来、病気や障害等によって、普通の人間生活を営めない者のことを指すようなのだが、廃人であること、ないしは廃人に向かっていく生き方が、普通の人間生活であると見なされてしまっているこの現代社会は本当に大丈夫なのだろうか？フローニンゲン:2019/1/3(木)13:01

---

## No.1539: Floating Scattered Clouds

Each scattered cloud represents a specific soul. I came up with such an image in my mind.

Groningen, 09:51, Friday, 1/4/2019

### 3627. 奇妙さの中にある美と逆向きの狂気

午後からの作曲実践では、今年の夏にフィンランドを訪れた際に購入した楽譜を紐解き、フィンランドの作曲家の誰か一人の作品を参考にして曲を作ろうと思う。

早朝に、過去に作った曲をMuseScore上にアップロードしていると、ある外国人の方が、私が大晦日の夜に作った奇妙な曲をお気に入り追加していることを知り、少々驚き、同時に笑ってしまった。

いかなる曲にも暗号のようなものが埋め込まれており、それを目には見えない手紙のように思えてくる。音楽理論に習熟すればするほど、そうした暗号の所在がわかり、それがいかなる暗号かがわかってくる。おそらく、音楽を単に聴く分にはそうした暗号を読み解く必要はないと思うのだが——深く音楽を聴こうとするのなら、音楽理論に習熟することは大切だと最近痛感しているが——、過去の作曲家の作品を参考にして作曲を学び、そして実際に作曲する際には暗号解読は不可欠である。

実は、大晦日の夜に作った奇妙な曲というのは、オリヴィエ・メシアンが提唱した「移調の限られた旋法」を活用した曲だった。厳密には、合計で七種類ある「移調の限られた旋法」のうちの第一番、つまり移調限度回数が二回の手法を活用した曲だった。それは、CホールトーンとC#ホールトーンを活用するもので、二つのCのスケールを活用していることから、遊び心を込めてタイトルもそれにちなんで付けた。その曲は、単に実験的に作ったものであり、全くもって美しいとは思わなかったのだが、ある外国人の方がお気に入り追加してくれていたことには少々驚いた。

人間の美的感覚は実に様々だと思った。もしかすると、単に風変わりな曲を好む人だったのかもしれない。当然ながら、いかに奇妙な響きを持つ曲であっても、作っている最中は、「奇妙さの中にある美」をなんとか掴もうとしているため、そうした曲にも自分の何かしらの美意識が反映されているの

---

かもしれない。話し言葉や書き言葉の中に、その人の存在感が滲み出すように、音楽も偽ることなく作り手を映し出してしまふものなのかもしれない。

これからも継続して作っていく一連の曲を通じて、自分の美意識がどのように発達していくのかを観察していきたい。自分の中では、10,000曲を作るまでは単なる実験に過ぎず、10,000万回の実験が終了してから、真に自分の曲が生まれてくるだろうと予感している。

昨夜寝室で横になり、眠りの世界に入る前に、「この世界は狂っているのだから、逆向きに狂わなければならない」という奇妙な考えが芽生えていた。そこからさらに、この人生を通じて、もしかしたら、日記に関してはわずか100,000ほど、曲に関してはわずか80,000曲ほどしか作れないかもしれないと思い、その少なさに少々暗澹たる気持ちになった。それぐらいの量では決して狂っているとは言えないのだから……。

この世界の狂気さに対して狂気を通じて向き合っていくことについては、また今後も考えることになるだろう。フローニンゲン:2019/1/3(木) 13:24

#### No.1540: Lonely Play of Drizzle

When I left home to the cheese store to which I often go, it suddenly began to drizzle. The drizzle also looked lonely in order to actualize itself. Groningen, 17:07, Friday, 1/4/2019

### 3628. 今回インテグラル理論を紹介することの危惧

時刻は午後の八時に迫りつつある。今日も一日が終わりに近づいていく。今日はまだ新年が始まって三日目であるから、もしかすると世間はまだ休暇中なのかもしれない。私は異国の地で、今日もまた、自分のライフワークを一步前に進めていた。

六時半の起床に始まり、就寝する夜の十時までライフワークだけに従事する生活を始めてもう随分と経った。少なくとも、欧州で生活をする三年間は、毎日がそのような形で進行していく。ようやく自分の人生を生きれるようになったのだ。今の生活の有り様、およびそこから日々滲み出す充実感と幸福感を見ていると、本当にそのように思う。

---

今日の夕方に、フローニンゲン上空の空が、なんとも言えない薄紫色の雲で覆われていた。雲の向こう側には沈みゆく太陽が存在しており、夕日とその雲の間に光を照射していた。その光景は妙に神秘的に思えた。

今日はついに、監訳中のウィルバーの書籍の第五章のレビューを終えた。いよいよ残すところあと二章となった。本日のレビューを通じて、巻末に執筆する解説の文章に関する新たなアイデアがまた浮かんだ。それは是非とも読者に伝えたいメッセージだった。明日は第六章をレビューしていく計画を立てており、レビューの最中に、また何か新しいアイデアが思い浮かぶかもしれない。そうしたアイデアが思いつき次第、それをメモしておくようにする。

今回の書籍を通じて紹介するインテグラル理論は、もう十年以上前に日本に紹介されている。知人であるインテグラル・ジャパンの鈴木規夫さんの精力的な活動のおかげもあり、インテグラル理論は随分と前に日本に紹介されているのだ。私もその恩恵を受けてインテグラル理論と出会い、実際にインテグラル理論を体系的に学ぶために、アメリカのジョン・エフ・ケネディ大学に留学した。すでに十年以上も前にインテグラル理論が日本に紹介されていたにもかかわらず、それが現在まであまり普及されていないのはなぜなのだろうか、と考えることがある。

確かに当時は、まだロバート・キーガンの成人発達理論が知られる前であり、ましてや「ティール組織」という概念が紹介される前であった。当時に比べて現在は、インテグラル理論の認知が高まっていく文化的な下地が出来つつあるように思う。一方で、インテグラル理論に出会った人たちの意識が十年前と変わっていないのであれば、結局今回インテグラル理論を紹介する試みは失敗に終わるのではないかと危惧している。

正直なところ、今回インテグラル理論を紹介することによって、かなりの確率でこの理論は、今から十年前とは比べものにならないほどに人々に認知されるように思う。だが、それは決してインテグラル理論を紹介することの成功ではない。私が危惧しているのは、多くの人たちがインテグラル理論という奥深く緻密な理論体系を、さらに深く自らで探究することをせずに探究を終わらせてしまい、その状態のまま実践活動に臨もうとすることである。これは現在、世の中に知られつつある成人発達理論に関しても状況は同じである。

---

これまで私は、成人発達理論の基礎の基礎を、できるだけ平易な言葉で、しかもそれは学術書の形式を取らない形で世に共有する中で、さらなる学習に読者の方が乗り出すことを促すメッセージを投げかけてきたつもりであった。だがそれもあまり有効ではなかったのかもしれないと思う。

今回の書籍の巻末の解説文の中で何を述べるかは、現在案を練っている最中であるが、伝えるべきことはきちんと伝えておこうと思う。「本書はあくまでも、インテグラル理論の入門書であること」「醒めた目を持つことの大切さ」「その上昇志向的な前のめりな姿勢を何とかすることから始めること」など、それらに関しては言葉を選びながら、適切に読者の方々に伝えようと思う。

視線を上げると、そこには闇が広がっていた。自分にできることは何なのだろうか、と今夜もまた考える。明日もまたそれを考えるだろう。フローニンゲン:2019/1/3(木)20:15

### 3629. ドルナッハの精神科学自由大学:音・色・意識・エネルギーの探究に向けて

今朝は六時前に起床し、六時半を迎える前に一日の活動を始めた。気がつけば、今日は新年四日目となる。今年は一切正月らしい過ごし方をしていない。その期間において、自分のライフワークに従事し続けるような日々が続いていた。それがもたらす充実感を思うとき、これからの正月はこのような形で過ごすのも悪くないのではないかと思った。無理に年末年始に日本に一時帰国する必要がないことに徐々に気づき始めている。今年の夏から欧米諸国のどこの国で生活をするのかまだ確定していないが、欧米生活の八年目が始まろうとしている。

昨夜、スイスのドルナッハにある、精神科学自由大学のプログラムについて調べていた。そのプログラムは、シュタイナーの思想を深く学ぶことを目的にしており、特にシュタイナーの芸術思想やユリズミー(オイリュトミー)を学ぶことができる点に着目している。

ここ最近思うのは、旧態依然とした学術機関で学びを得たいと思うことががますます減っているということだ。残っていることとすれば、芸術教育哲学と音楽理論ぐらいだろうか。一方で、進歩的な学術機関で学びたいと思うことはまだいくつかある。その一つは、精神科学自由大学で探究を深めることのできるシュタイナーの思想であったり、ソフィア大学をはじめとした米国西海岸のいくつかの大学院で探究することのできるトランスパーソナル心理学や実存主義的心理学を中心にした、霊性の科学などである。

---

昨夜は、精神科学自由大学が提供するプログラムのカリキュラムを調べていた。そこは名称として「大学」という言葉が付されているが、伝統的な意味での大学ではない。そこは一つの研究機関のような機能を果たしており、それゆえに、私に関心を持っているプログラムも一年ほどの長さでありながらも、特に学位が取得できるわけではない。そのプログラムの内容は、今の私の関心を強く引いている。

今すぐにはではないが、もう数年したらドルナッハに住み、精神科学自由大学に通いたいと思う。その前に、芸術教育哲学と音楽理論に関して、どこか別の大学院で学びを深めようと思っている。芸術教育について学んだ後に精神科学自由大学に行く目的は、音楽や絵画芸術と関連付けた形でシュタイナーの思想を探究していくことにある。

起床してすぐに、書斎の机の上に置かれている一冊の書籍の表紙に目が止まった。本書は、“Expanding Tonal Awareness: A Musical Exploration of the Evolution of Consciousness (2014)”というタイトルの書籍であり、シュタイナーの音楽思想に基づいたユニークな音楽理論書である。普段私は、この書籍の中にある、五度圏(サークル・オブ・フィフス)の解説を読みながら、各調の特徴を確認した上で作曲実践を始めるようにしている。いつも何気なく手にとっている本書の表紙を眺めた時、なぜだかわからないが、「音と意識」「音とエネルギー」「色と意識」「色とエネルギー」というテーマを、シュタイナーの思想を参考にして探究していこうと思った。音、色、意識、エネルギーという四つの事柄には、今の私にはまだ全くわからない未知な要素が無限に存在している。フローニンゲン：2019/1/4(金)06:45

#### No.1541: A Spiral of Irreversible Time

Today, one day in my life, now is approaching the end. It is human nature that we cannot resist the irreversibility of time. Groningen, 21:10, Friday, 1/4/2019

#### 3630. [グルジェフが登場する劇に関する夢](#)

時刻は午前七時に近づきつつある。この一、二週間ほど、スクリャービンのピアノ曲全集を聴いていたが、昨夜からバルトークのピアノ曲全集を聴き始めた。およそ九時間のこの全集を今日もかけながら、諸々の仕事に取りかかっっていこうと思う。

---

今日は、ウィルバーの書籍の監訳に関しては、第六章の翻訳をレビューしていこうと思う。明日は別の仕事が入っているため、最終章のレビューは今週の日曜日に行く予定である。毎日一章のレビューを積み重ねていくことによって、早いもので、今週末に全ての章のレビューが完成する。来週の月曜日と火曜日に、「はじめに」と巻末に掲載する解説の文章を執筆したいと思う。その後は、文章を寝かせる期間を少し設けたい。

今朝方もいくつか興味深い夢を見ていた。一つは、数年前に日本で知り合った同世代の友人が夢の中に現れ、彼には弟はいないのだが、四男の弟の高校生が立案したビジネスプランに助言をしている、という話を聞いていた場面である。具体的にどのようなビジネスプランなのかはわからず、実はその前後のやり取りを覚えていないのだが、その友人が夢に現れたのは初めてであったため、印象に残っている。

次に覚えている夢の場面は、さらに興味深い。夢の中で私は、夢の観察者としてそこにいた。つまり、自分が夢の中の登場人物なのではなく、夢をあたかも映画を見る観客のようにして見ている者としてそこにいたのである。そこは、空き地のような場所であった。おそらくその場所は、日本ではなく、欧州のどこかの田舎町にあるものだ。

そこでは、一風変わったダンスが踊られていた。見ると、そこには神秘家のグルジェフと、一人の日本人ダンサーがいた。どうやら、その男性の日本人ダンサーは、グルジェフに師事しているらしかった。ここで行なわれているダンスは、グルジェフの思想が体現されたもののようであった。グルジェフは終始、椅子に腰掛けて、その空き地で行なわれているダンスを眺めている。

すると、ダンスが佳境に入ったのか、その日本人ダンサーが激しい踊りを披露した。激しい踊りというよりも、曲芸的なパフォーマンスであり、空き地に置かれた背の高い丸太に捕まり、体を地面と水平方向に維持しながら、鉄棒の大車輪を横向きで始めたのである。その回転速度は極めて速く、彼にしかできないパフォーマンスであることがわかった。そこで行われていたダンスは、一種の劇のような要素も含まれており、男性のダンサーの相方として、女性のダンサーもいた。

その男性のダンサーはしばらく大車輪を披露すると、あるところで、静かに回転を緩め、地面に伏した。どうやらそれも劇の一つのシーンのようだった。そこでそのダンサーは、流暢な英語で何かセリ

---

フを述べた。それに対して、グルジェフは椅子から立ち上がり、英語で応答をした。どうやらグルジェフも、この劇の一登場人物だったようだ。グルジェフがひとことふたこと何かを述べた後、空き地は静かに溶解していき、夢の場面もそれに応じて変わった。フローニンゲン:2019/1/4(金)07:09

### 3631. 竜の背中に乗る夢

今日一日分のコーヒーが、つい先ほど完成した。コーヒーの香りが書斎の中にほのかに漂っている。今日の天気は曇りらしいが、幸いにも雨は降らないようなので、午後に散歩がてら、行きつけのチーズ屋に立ち寄ろうと思う。また、チーズ屋の近くにあるスーパーで寿司のパックを二つほど購入したい。

今朝方見ていた夢は、先ほど書き留めていた以外にもまだ他にある。夢の中で私は、巨大な部屋の中にいた。そこには物がほぼ何も置かれておらず、四方に見える壁以外は、物らしい物はないように思えた。その巨大な部屋の中では、私は一人の小人のように小さかった。自分がそのような巨大な部屋の中にいることに気づいた時、私はその部屋に浮かんでいる竜の背中の上にいた。

竜の背中に乗っているというよりも、竜の背中から落ちないように背中にしがみついていると言った方が正確かもしれない。竜の動きそのものは激しくないのだが、竜がゆっくりと動くのに合わせて、背中が波打つように動く。その動きによって竜の背中から落ちてしまわないようにすることに私は必死だった。

しばらくそうしたことを続けていると、ようやく竜の背中の動きの特徴がわかり、そこからは竜の背中にうまく乗れるようであった。すると、竜の背中から、老婆の声が聞こえた。それは、「役に立たないと意味がない」という声だった。その声が聞こえてきた時、私は一瞬どこからその声が聞こえてきたのか戸惑ったが、竜の背中から聞こえてきた声であるとわかると、妙に安心感があった。

すると、竜は巨大な部屋の壁際にゆっくりと移動していった。その部屋があまりにも巨大であるため、先ほどは気づかなかったが、壁に近づいてみると、壁際に無数の衣服が山のように積まれていることに気づいた。壁際に近づくと、竜は私を背中ら降ろすかのように、背中を衣服の山の方にゆっくりと傾けていった。それを察知した私は、衣服の山の方に向かってジャンプした。衣服の山の上に無

---

事に着地したのだが、その山が静かに崩れ去り、私は壁際の地面に降り立った。そこでまたしても、壁から老婆の声が聞こえてきた。内容は、先ほどと全く同じものだった。

その声が聞こえてきた瞬間に、遙か遠くに見える部屋の入り口から二人の友人が部屋に入ってくる姿を見た。すると、先ほどまでは巨大であった部屋が、一気に通常の部屋の大きさに戻った。部屋に入ってきた二人の友人は、壁に寄りかかっている私に声をかけてきた。

友人A:「どうしたの？そんなところで」

私:「いや、壁から声が聞こえるんだよ」

友人B:「えっ、誰の声？」

私:「見知らぬ老婆の声なんだけど」

友人A:「えっ、本当？それはきっと私のおばあちゃんの声だわ」

一人の女性の友人がそのように述べた。彼女は壁際に近づき、壁に左手を当て、右手を自分の耳に当てた。すると、彼女は「本当だ。おばあちゃんだ」と述べた。彼女は嬉しそうな表情を浮かべており、しばらく老婆の声を静かに聞いていた。するとそこで夢の場面が変わった。フローニンゲン:

2019/1/4(金)07:25

### 3632. 親友とのやり取りとマイクロソフトの筆頭株主に関する夢

もう一つだけ日記を書き留めてから、本日の活動を本格的に始めていきたい。今朝方見ていた最後の夢の印象がまだ残っている。

夢の中で私は、親友の一人(HS)とお互いに神妙な顔で話し合いをしていた。どうやら先日、私は街中の坂道を自転車で勢いよく下っている最中に、親友のお姉さんと衝突してしまっただらしかった。その衝撃がひどく、親友のお姉さんは脊髄を損傷してしまい、今後子供を産むことが難しい体になってしまった、と友人から伝えられた。それを聞いた時、私は謝罪の言葉が見つからないほどに悪いことをしてしまったと思った。その親友はいつもはとても優しいのだが、その時ばかりはどうも私に怒

---

りの感情を向けているようだった。彼が押し殺している怒りに気づいた時、自分がしたことに対してさらに申し訳ない気持ちになった。

二人でもう少し話をしていると、どうやらそこが、私たちが通っていた小学校の、しかも低学年用の校舎の靴箱の前であることに気づいた。すると、私たちは教室に戻るために階段を上がった。奇妙なことに、階段を上った先には、低学年用の校舎の風景ではなく、高学年用の校舎の風景が広がっていた。友人と私はその場で別れ、友人は右回りで教室に行き、私は左回りで教室に向かうことにした。

渡り廊下を歩いている時に、窓の外を眺めると、光り輝く天気雨が降っていることに気づいた。私はその輝きを眺めながら、教室に向かい、教室に入る前に、教室の左隣にあるトイレに立ち寄った。そこで用を足そうとすると、一人の後輩がトイレに入ってきた。そして、突然私に話しかけてきた。

**後輩:**「マイクロソフトの筆頭株主は誰でしたっけ？」

**私:**「えっ、さあ、誰だったっけ？」

後輩は、突然私にそのような問いを投げかけ、以降は下を向いたまま用を足していた。トイレから出ると、なぜか私は教室ではなく、一階に降りて、中庭を散歩しようと思った。すると私の後ろから、一人のアメリカ人が日本語で私に話しかけてきた。彼は開口一番、「マイクロソフトの筆頭株主をご存知ですか？ スティーブ・バルマーですよ」と私に述べた。

私は別にマイクロソフトの筆頭株主が誰かに関心はなかったため、話半分でその人の話を聞いていた。その人は私に話しかけてくることをやめず、中庭を抜けるまでずっと一緒だった。中庭を抜けてみると、なんとそこはボストンの街中だった。いくつか見慣れた建物があり、それを頼りに散歩しようと思って歩いていると、突然携帯のアラームが鳴った。なにやら、日本で巨大な地震が起こったという速報だった。速報メールを開き、その他のメールを確認してみたところ、二人の友人が私をCCに入れて、地震についてあれこれやり取りをしていた。

二人のメールを読んだ後に、先ほどまで学校の靴箱の前で話をしていた親友から二通のメールがあった。直近に届けられた方のメールを開いてみると、お姉さんの体は無事であり、脊髄にも何ら問

---

題はなく、今後子供が産めなくなってしまうというのは誤診であったという連絡が入った。私はそれを知って、とても嬉しく思い、すぐに親友にメールを返そうとした。そこで夢から覚めた。フローニンゲン:2019/1/4(金)08:00

No.1542: A Fairy in a Forest

A new quiet day began today, too. Groningen, 09:48, Saturday, 1/5/2019

3633. [インテグラル理論を紹介するにあたって](#)

時刻は午後の二時半を過ぎた。昨日は太陽の光をふんだんに浴びることができたが、そこから一転して、今日は曇り空である。明日以降もまた天気が崩れるらしい。

今朝もここ数日間に引き続き、ケン・ウィルバーの書籍の監訳の仕事に従事していた。その仕事は順調に進んでいる。監訳者として有り難いのは、翻訳者の知人の方が素晴らしい翻訳をしてくれており、こちらから指摘することがほとんどないということだ。もちろん、言葉のニュアンスや、読者にとってより読みやすい文章にしていくための指摘はしているが、それらの数はそれほど多くない。

本書は全七章で構成されており、今日は第六章のレビューを終える予定のため、レビューもあと少しだと思っていた。しかし、ウィルバーの書籍は注記が充実しているものが多く、本書もまた例外ではなかった。レビューを開始した時の私は、すっかり注記の存在を忘れていたのである。第七章に関する注記はないようであるが、それでも注記の分量はかなりのものになるため、注記をレビューすることに二日の時間を充てようと思った。明日は他の仕事が入っているため、もしかしたら最終章のレビューは日曜日に回すかもしれないが、注記を含めて全てのレビューが完成するのは、来週の月曜日ないしは火曜日になるだろう。

先ほど、仮眠を取っている最中に、不思議なビジョンを見ていた。それは明瞭なビジョンというよりも、思念の渦のような視覚現象だった。端的には、現代社会の有り様についてビジョンを通じて考えていたようなのだ。より正確には、私は何も考えておらず、ビジョンが何かを考えていたようだった—この表現が伝わるのか定かではないが、最も正確に表現すればそうなる。

---

昨夜の日記で書き留めていたように、知人であるインテグラル・ジャパンの鈴木規夫さんの貢献や、ロバート・キーガンの書籍を翻訳した方たちの貢献もあり、インテグラル理論を再度日本社会に紹介する機が熟したように思う。成人発達理論に対する認知が進んだこのような状況において、インテグラル理論を紹介する土壌が整い、今回満を持してインテグラル理論を紹介することになるのだと思う。仮に今回、インテグラル理論の認知が日本で進まなければ、もう今後それが実現することはないのではかたさえ思ってしまう。そのような状況下でインテグラル理論を紹介できることは、監訳者冥利に尽きるが、どことなく不安だ。どことなく懸念がある。

先ほど仮眠中に見ていたビジョンは、まさにそうした懸念が具現化されたもののように思えてくる。端的には、インテグラル理論を紹介することによって、人々は間違いなく、「インテグラル(統合的)」であろうとするだろう。言い換えると、インテグラルな段階へと向かっていくことに邁進し始めるであろうことが目に見えている。成人発達理論に関して見られる昨今の現状とまたしても同じことが起きてしまうのではないかという危惧が絶えない。

本書の中でウィルバーが指摘しているメッセージがきちんと人々に伝わるだろうか。それは、「統合的である前になすべきことがある」ということである。それについてはここで具体的に取り上げないが、端的には、自己及び社会の基礎構造が今この瞬間に抱えている課題を見極め、それに取り組むことが最優先であって、それなしでは高度な発達段階など生まれ得ないということだ。

盲目的かつ熱狂的に高度な発達段階を希求するような風潮が生まれないことを強く願う。おそらくそれを願うだけではダメであり、人々がそうした衝動をほぼ間違いなく抱くであろうことに言及し、それを制する必要があるだろう。今回、インテグラル理論を紹介するだけではダメなのだ。それを紹介した上で、その接し方にまで言及した上で、生じるであろう異常な衝動を制しなければならない。目新しいという理由だけで、単に外来思想を紹介することほど無責任なことはない。

私が以前師事していた発達心理学者のオットー・ラスキー博士が、「責任と限界を結びつける思考と在り方」について述べていたことを思い出す。自分の責任、そして限界が色々と明らかになり、それらを結びつける思考と在り方についてなんとなく見えてきているものがある。フローニンゲン:2019/1/4(金)15:02

---

No.1543: Jocular Rhythm

Now it is 4PM. I'm seeing drizzling at this moment. After some break, I'll start evening work.

Groningen, 16:08, Saturday, 1/5/2019

3634. 不可逆な時の螺旋の中で

今日もまた、人生のある一日が終わりに差し掛かっている。この人生は一体なんなのだろうか。このように流れていく人間の一生とはなんなのだろうか。そのようなことを考える。

時の不可逆性に抗うことができないというのは、人の性なのだろうか。

どうもしめやかな気持ちとする。

時刻は夜九時を迎え、辺りの闇はこれ以上ないほどに深くなっている。夕方の四時に、行きつけのチーズ屋に足を運ぶために街の中心部に出かけた時、もうその時間は辺りが薄暗くなっており、自宅を出発してすぐに霧雨が降り始めた。うすらひっそりとした奇妙な生き物が現れてもおかしくないような雰囲気が辺りに漂っていた。それはそれで幾分幻想的ではあった。

自分の人生がいかなるものであるかを問わない日はない。人生のある一日がいかなうものであったかを問わない日もない。自分がいったい何者であり、どこに向かっているのかを問わない日はない。

欧州でのこの三年間は、本当に毎日が問いの連続である。時に自分が何を問うているのかさえわからないぐらいに、問いが向こうからこちら側にやってくる。それに答えようとしても無理である。なぜなら、それは答えられるような量ではなく、問いというのはそもそも、こちらから答えていくような類いのものではないからである。

問いは自らを問い、自らに答えを与えていくという性質を持っている。では、この自己は問いに対していかなう態度を持っておくべきなのだろうか。問わずしてそこにあり、答えずにしてそこにある。「ああ、やはり自己はそこにあるものなのだ」という言葉が漏れてくる。

---

本当に今日という一日が存在していたのだろうか。いったい自分は今日という日に存在していたのだろうか。自己と存在の問題がまたしても浮上する。

今日も何気なく三曲ほどの曲を作っていた。未だ創造活動における爆発は起きず。いや、それが起きないようにまだ制御をしているのだ。日記の執筆も、作曲実践も、日々、抑えに抑えた量しか従事していない。一人の人間の創造性というのはその程度のものではないはずである。

米国での四年間、欧州での三年間の生活。欧米ではまだたったの七年間しか生活を送っていない。これからの人生はどのようになるのだろうか。このまま欧米で人生を過ごしていくと、自分は一体どのようなようになるのだろうか。

特に日記を綴るつもりなどなかったのだが、気づいた時には文章を書いている自分がいた。言葉を紡ぎ出している自分がいた。おそらくこれでいいのだろう。こうした形で人生が過ぎていくことを肯定すること。おそらくそれが大切なのだろう。

今日という一日、そして自分の存在は、夕方の霧雨のようなものなのかもしれない。これから少しだけゴッホの手紙を読もうと思う。そしたらもう就寝だ。おそらく明日はやってくるだろう。またいつもと同じように不可逆な形で。フローニンゲン:2019/1/4(金)21:27

### 3635. 成人発達理論やインテグラル理論を学ぶ際に求められる「醒めの体験」

時刻は午前六時半を過ぎた。今朝は六時前に起床し、一日の活動を緩やかに始めた。昨夜の就寝前の日記で書き留めたように、今日が本当にやってきた。再び新たな一日が始まったのである。

夜中に小雨が降っていたのか、書斎の窓には微細な雨滴が付着している。

闇の世界の中で就寝し、闇の世界の中で目覚める。そうした様子を眺めるとき、私たちは本質的には闇を通じて—ないしは闇の中で—目覚めていく必要があるのではないかと思えてくる。ちょうど現代社会は、闇の中の世界として存在している。偽りのまばゆい光だけがそこに差し込んでいる。

---

今日は土曜日であるが、午後から一件ほど協働プロジェクトに関する仕事がある。それ以外の時間は、日記を執筆することや過去の日記を編集すること、そして作曲実践とウィルバーの書籍の監訳の仕事に時間を充てていきたい。就寝前には願わくば、ゴッホの手紙の続きを読んでいこうと思う。監訳の仕事に関して言えば、今日はいよいよ本文の最終章である第七章の翻訳をレビューする。昨日言及したように、本書は注記も充実しているため、注記に関するレビューは明日・明後日、ないしは明々後日まで見込んでレビューを進めていきたい。

昨日の日記の中で、今回インテグラル理論を紹介するに際しての諸々の注意点のようなものを書き留めていた。そこには、紹介する自分自身が注意しなければならない点も含まれていたし、インテグラル理論に触れる実践者に向けた注意も含まれていたように思う。起床直後もまたぼんやりとそれらの論点について考えていた。

インテグラル理論は優れた洞察と実践を豊かにしてくれる一つのメタ理論であることは確かだが、そもそもこうした理論の活用の矛先が向かう問題そのものの性質や構造を深く認識する力がなければならぬ。そうした認識能力がないままにインテグラル理論を活用しようと思っても、問題の解決はおろか、単にインテグラル理論をわずかばかりにかじる消費行動しか生み出さないのではないかと、いう危惧がある。

確かに、インテグラル理論は、自己及び自己を取り巻く社会の構造的な問題を認識していくための力を涵養してくれる枠組みとして生み出されたものなのだが、この理論を学び始めた人がそうした認識能力を獲得していくことは稀であるように思えてくる。その要因について考えてみると、それは多岐にわたっており、またそれらが関係し合っていることを考えると、一つの要因に還元することはできないが、今朝方ふと考えていたのは、インテグラル理論を学ぶことと並行して、ある個別具体的な実践領域に関する探究と実践が中途半端なものであることが一つの要因として挙げられるのではないかということだった。

これはビル・トーバートの段階モデルが指摘するような「専門化型 (expert 段階)」の探究と実践が必要だと述べているわけでは決してなく、一つの実践領域をこれ以上ないほどに突き詰めていった際に必ず突き当たるであろう「その領域固有の限界」に気づくこと—あるいは、その領域固有の支配的な価値観の所在を突き止めること—が大事なのではないかということだ。

---

私はこれまで、成人発達理論やとりわけ非線形ダイナミクスに代表されるような複雑性科学に関する探究をしていく中で、この点に気づかされる経験があった。直近で言えば、まさに複雑性科学の理論と手法を活用した発達研究に邁進していた最中に、ある時ふと、「醒めの体験」をすることになった。端的には、複雑性科学の理論と手法を活用して研究をしているということそのものが、当該科学領域の狭い世界観の中での営みに過ぎないということに気づいたのである。その他にも、研究で用いる理論や手法そのものが、その科学領域の特定の世界観によって支配・決定されていることに気づいたのである。

成人発達理論に関しても似たような醒めの体験を経験している。もちろん、複雑性科学や成人発達理論の枠組みが特定の文脈において有用であることは間違いないが、そうした科学領域や理論的枠組みが、実はある限定的な世界観によって支配されている可能性を疑えることが重要なのではないかと思う。

成人発達理論やインテグラル理論の実践者に対していつももどかしく思うのは、個別具体的な探究と実践を中途半端なところまでしか推し進めていかないことである。その状態のままでは、いつまでもそれらの理論を消費する程度にとどまり、下手をするとそれらの理論に食われる、ないしは夢の世界に引きずり込まれる——というよりも、既存の夢の世界を強固なものにすると述べた方が正確かもしれない。

自らが従事する探究と実践が、ある特定の価値観でしか通用しないものであるという可能性に気づくまで、徹底した探究と実践を行う必要があるように思える。それ以外に醒めの体験をもたらすものにはどのようなものがあるだろうか。引き続きこの点について考えていく必要がある。フローニンゲン：2019/1/5(土)07:15

### 3636. 発達に対する淡い期待と「発達のマゾヒズム」

ヨーロッパの冬は、本当に暗い。おそらく、多くの日本人が何か憧れのようなものを抱きがちなヨーロッパの国々は、ことごとく冬が厳しいのだと思う。それが現実だ。

暗い。今日も外が暗い。

---

今、コーヒーメーカーが一日分のコーヒーを一生懸命作ってくれている。その音は自分をどことなく励ましてくれる。

欧州で過ごす新たな一日がまた始まった。次から次へと新たな一日が始まることに対して、改めて驚く。望む望まないに関わらず始まる新たな一日。

昨日ふと、ゴッホの手紙や音楽理論に関する書籍、さらには芸術教育哲学に関する書籍に並行して、ヨルゲン・ハーバマス、ミシェル・フーコー、ロイ・バスカーの書籍を近々読んでいこうと思った。ハーバマスとフーコーの書籍は少し前に集中的に読んでいたのだが、バスカーの書籍に関してはまだ何も手をつけていない。私が以前師事していたオットー・ラスキー博士や哲学者のザカリー・スタインもバスカーの哲学思想に精通しており、彼らが影響を受けたバスカーの書籍を私も読んでみようと思う。

先ほどもまた、インテグラル理論について日記を書き留めていた。言いたいことが次から次へと生まれてくるのはどうしてなのだろうか。それについても今、再度立ち止まって考えている。

それにしても、インテグラル理論を学び、統合的であろうとすることが、逆に統合的になることを遠ざけていくというのは、とても自己矛盾的な皮肉のように思える。こうした皮肉を乗り越えていくためには、今以上にたくましい知性と新たな意識の在り方が求められるのだが、それはすなわち、そうした知性や意識の在り方が体現された発達が必要だと述べていることに他ならず、そもそもそうした発達が起こらないことをここで問題にしているのだから、どうしようもないように思えてくる。

人間というのは私たちが思っている以上に発達しないものなのだ。そうした認識を絶えずどこかで持っておくことは不可欠のように思える。そうした認識がなければ、発達という現象に対して過剰な期待を抱いてしまい、それが上記のような自己矛盾的な状態を生み出してしまう。その状態に自らで気づければいいのだが、それに気づくことができないのも、発達に対して過剰な期待を寄せていることと関係しているかもしれない。

発達に対して淡い期待を抱くことは、冒頭で言及したような、欧州の地に対して淡い期待を抱くのと似ているかもしれない。実際に欧州の地に行って、生活をしてみるというのはどうだろうか。そうすれ

---

ば、欧州で生活することの厳しさがわかるかもしれない。それがわかれば、欧州での生活も発達も、単に淡い期待で彩られたものだったのだということに気づけるかもしれない。

ウィリアム・ジェイムズが述べるように、物事を直接体験するということは、何にも増して非常に重要なことである。欧州で生活することであれば直接体験を積みやすい——誰でもできる——のだが、発達に関しては自分が憧れを抱くような発達段階を実存的に経験することが難しいというのは難点だ。

実際のところは、過去にそうした高度な段階に到達した人たちの体験が記述された文献を読んでも、そこには過酷な実存的課題が存在していることがわかるはずである。また、このような現代社会において、高度な発達段階に到達している人は周縁に追いやられ、マイノリティーとしての実存的苦悩のようなものを抱えるようになるだろう。それでも高度な発達段階に漠然とした憧れを抱き続けるというのは、発達現象に関してよほど無知であるか、歪な「発達のマゾヒズム」を抱えているからなのかもしれない。フローニンゲン:2019/1/5(土)07:44

### 3637. 今朝方の夢

起床してからすでに一時間半以上が経っているが、まだ今朝方の夢について書き留めていなかった。憶えている範囲の事柄を書き留めておきたい。

夢の中で私は、立派な体育館の中において、バスケの試合に参加していた。その体育館は立派な作りであったから、観客席も多く、実際に多くの観客が試合を観戦していた。そこで行われていた試合は、中学校時代の部活のメンバーと他校のメンバー、さらにはNBAのアメリカ人選手も混じって行われるという奇妙なものだった。試合開始の際のジャンプボールの時に、相手チームの一番背が高い選手がすでにその場にいるのに、こちらのチームからは誰もセンターサークルに立とうとしない様子を見て取った。

誰もそこに立たないのなら自分が立つという仕草を見せたところで、こちらが一番背の高い選手がセンターサークルに立った。審判によってボールが空中に投げられ、そこからいよいよ試合が始まった。普段はガードを務める私は、今日はなぜだか左フォワードのポジションで試合に参加しようと思っ

---

た。というのも、こちらのチームにはすでにガードがいるようであったから、彼に任せていいと思ったのである。

この試合がどれほど重要なものかは定かではなかったが、この試合は必ず勝つ必要があると私は考えていたようであり、その意思が奇妙な能力を生み出した。端的には、一人だけ空中を飛びながら試合に参加できる力が芽生えたのである。私はその能力を使って、誰も手が届かない位置からダークシュートを決めたり、相手のシュートを空中でことごとく止めたりすることを行っていた。そのおかげか、私たちのチームは得点を着実に重ねていくことができ、相手チームの得点はゼロのままだった。

しばらくして、私は空中から地上に降りて試合をすることにした。そこでようやく相手チームが初得点を決めた。それは試合開始から12分経ってからのことだった。その得点に対して、相手チームのサポーターは沸き立っている。それを見て、私はまた空中を飛びながら試合に参加しようと思った。そこで夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、見覚えのない自宅の中に、私は母と共にいた。周りを見渡してみると、どうやら引越しを終えたところらしい。開けられていないダンボールが至る所に転がっている。すると、玄関から呼び鈴を鳴らす音が聞こえてきた。母がそれに応答すると、どうやら私が外国から送った、何冊もの書籍が詰められたダンボールのようだった。そのダンボールはそれほど大きなものではなく、母一人でも持てるような重さのものだった。

すると、それを配達してくれた人が、「今回の配送は学割を利用されているようで、申し訳ないのですが、それを証明するものを見せていただけますか？」と述べた。母はそれに対して少々戸惑っているようだった。というのも、その時の私は、留学から一旦日本に引き上げてきたという点においてはすでに学生ではなく、だがこれから再び米国の大学院に留学するという点では学生のようにもあつたからだ。実際に、米国大使館で学生ビザを数日前に取得したのだから、再び学生だと言えなくもない。

そうした中途半端な社会的地位を持っている私を知っている母は、どのようにそれを配達員に説明すればいいのか戸惑っているようだった。すると、配達員の方は、「実は私、この近所に住んでいて、

---

息子さんらしき人がランニングに出かけていく姿を見たことがあるのですが、明らかに学生ではないですね？」と述べた。それを聞いて私は思わず立ち上がり、自分で説明をしようと思った。日本に引き上げる前に所属していた大学の学生証を見せるのは、その大学をすでに卒業してしまっているために気が引けたため、学生という身分を疑うのであれば、米国大使館に電話をしてください、という旨のことを配達員の方に伝えようと思ったところで夢から覚めた。フローニンゲン:2019/1/5(土) 08:08

### 3638. 現代の諸々の技術との向き合い方について

時刻は午後の四時半に近づきつつある。今、小雨が降りしきる様子を眺めている。

先ほど少し休憩をしたので、これから夕方の仕事に取り掛かりたい。今日は午前中に、監訳中の書籍の翻訳のレビューを終えた。ただしこれは、全七章の本文に対するレビューを終えただけであり、まだ注記へのレビューが残っている。これから注記のレビューを始めていきたい。できれば今日中に、一章から三章までの注記に対してレビューを行い、残りの四章から六章(七章には注記はない)までのレビューを明日行いたいと思う。注記のレビューが終われば、レビューに関してはひと段落となる。あとは私の方で、「はじめに」と巻末の解説文を執筆していきたいと思う。それは来週の月曜日と火曜日にかけて行う予定だ。

先ほどふと、世間ではAIやブロックチェーンの技術の活用にかなりの熱を入れているようだが、大きな視点で見れば、それは原始人が火を活用し始めた程度のこと、あるいは棍棒を使い始めた程度のことと変わらないのかもしれない、と考えていた。それぐらいに、私たちの今目の前に現れている現象というのは、特定の時代背景によって出現したものに過ぎず、それらにあまりにも前のめりになって熱を入れるというのは幾分滑稽に思える。もちろん、AIやブロックチェーンの技術は今後より実用化が進めば、これから数百年、ないしはより長く活用され続けていくかもしれない。

だが、今の人類が、原始人たちが火や棍棒の技術を活用していた時の向き合い方とはまるっきり異なった意識でそれらを活用している——現代社会において火は活用していても、棍棒はもはや使い場がほぼないだろうが——ことを考えると、また違った態度で現代の最新技術なるものと向き合えるのではないかと思う。

---

午後に仮眠を取った後に作曲実践をしたのだが、そこではあまり自分の内側から創造エネルギーが芽生えてこなかった。曲を作っている後半から、あまり気乗りしない感覚となり、そういう時には曲を無理して作る必要はないだろうと思ったので、形になろうとするものがある程度の形になったところで作曲実践を終えた。これは文章の執筆についても言えることだが、無理をして何かを生み出す必要はない。内側で形になることを待つものに対してだけ言葉や音を当てていくことが賢明だ。

無理をして内側から外側に引っ張り出そうとするのは望ましくない。とにかく無理をせず、小さな形を絶えず残していくことが大切であるという点を忘れずに、夕食後の作曲実践に臨みたいと思う。フ  
ローニンゲン:2019/1/5(土)16:36

### 3639. 小鳥の清澄な鳴き声から

今朝はゆっくりと、七時前に起床した。早朝のヨガの実践を終え、一日分のお茶を入れたところで、一日の活動を始めた。昨日は珍しく、二曲ほどしか曲を作らなかった。夕食後にも作曲実践を行おうと思っていたのだが、何かを創造するエネルギーがそれほど高まっていないことを感じていたため、無理に曲を作ることをしなかった。そうした兆候は、すでに午後の作曲実践の時にも見られていた。また、昨日は日記に関してもそれほど文章を書き綴ることをしなかった。創造性に関するエネルギーも、まるで一つの生命のように動きがあるようだ。

良質な睡眠をしっかり取ったおかげもあり、今日の状態はとても良好だ。新年を迎えての最初の日曜日がこれから本格的に始まっていく。

今回の年末年始は日本に一時帰国しなくて正解だったように思う。その期間に随分と自分のライフワークを前に進めていくことができた。創造活動しかり、書籍の監訳の仕事しかりである。

昨年の年末年始は日本に一時帰国したのだが、その時に、日本に到着してから数日後に珍しく体調を崩してしまうことがあった。フライト中に睡眠をあまり取らなかったことと、日本に到着した夜に、空港からホテルまでの移動に少々てこずってしまい、疲労が蓄積していたことが関係していたのだろう。そのような経験をしたため、無理に年末年始の寒い時期に日本に戻る必要はないのではないかと考えるようになった。今回の年末年始は、実際にそれを実行に移したのだが、オランダでの年

---

末年始の充実した過ごし方を見ると、これは来年以降の年末年始も続けても良いかもしれないと思う。

今日はまず、バッハのコラールに範を求めて作曲実践をする。昨日の早朝の作曲実践では、バッハの曲に範を求めることをあえてしていなかった。その他に参考にしたい曲があったからである。しかし今日は、再びこれまでの習慣であるバッハの曲を参考にしていきたいと思う。この時の作曲実践で意識することは、今回はあえてできるだけバッハの曲の構造的なパターンに忠実になってみるということである。もちろん、それだと単なる完全な模倣になってしまうため、自分なりの工夫を凝らしていくのだが、バッハが曲に埋め込んだ構造と、バッハの構造を生み出す力のようなものを特に意識し、それらを汲み取りながらの工夫を施していく。

小鳥の鳴き声がどこからともなく聞こえて来る。それに耳を傾けていると、とても瞑想的な意識になる。小鳥の声に耳を傾けること一つ取ってみても、それには意識の変容作用があるのかもしれない。

昨晚、夕食を摂りながら音楽理論のポッドキャストを聞いていた時、「小鳥の鳴き声は音楽たりえるか？」という興味深い問いが取り上げられていた。この問いは、美学と音楽理論と密接に関わった大変深いものだと思う。この問いに対する自らの回答を醸成していくことをこれから行っていく。現在も暫定的な回答はあるが、それを今ここで書くことをしない。それを書くよりも前に、今この瞬間に鳴り響いている小鳥の声そのものに耳を傾けていたい。小鳥の清澄な鳴き声から始まる一日がこれからゆっくりと動き出していく。フローニンゲン:2019/1/6(日)07:38

#### No.1544: The Serene Interior World

Needless to say, the weather in Groningen is horrible (gloomy) today, too. Nonetheless, it is solace that I can find a serene flow in my interior world. Groningen, 09:58, Sunday, 1/6/2019

#### 3640. 成人発達理論やインテグラル理論に対する消費的態度に関して

昨日、現在監訳中のウィルバーの書籍の本文に対するレビューが無事に終わった。その流れに乗る形で、注記に関してもレビューを進めていき、第二章の注記に対するレビューも終えた。残っているのは、第三章から第六章の注記のレビューだけとなった。昨日は午後に他の仕事が入っていた

---

ため、レビューに割ける時間をそれほど取ることができなかったのだが、それでも着実にレビューを進めることができた。今日は比較的時間があるため、レビューも進んでいこう。ただし、焦ってレビューをする必要はないので、残りの章のレビューを二日に分けることも可能なのだが、今日の午前中のレビューの進み具合と自分の状態などを見て、もしかすると一気に残りの章の注記をレビューするかもしれない。

昨日、浴槽に浸かっている最中に、成人発達理論やインテグラル理論の枠組み、ないしはその他の理論も含めて、多くの人たちがそれらを消費対象とみなす傾向について考えていた。そこには、理論に対する深い咀嚼が欠けており、まるで物をお粗末に消費するような特性が見て取れる。そこには、理論と深く向き合っていこうという態度が欠落しており、この現代社会を反映するような消費行動だけがそこにある。消費行動は、物質圏のみならず、着実に精神圏にも及び始めているようだ。

さらには、それらの理論を消費する際には、自らの探究や実践が、どのような文脈や世界観に依拠しているものなのかに対して無自覚であるという問題も存在している。そうした無自覚な状態の中で、成人発達理論やインテグラル理論を含む様々な理論が、企業社会における金銭獲得運動のためだけに活用されてしまっているのが現状ではないだろうか。

この問題を解決していくためには、自己及び自らの実践活動が、どのような文脈や世界観の中で生起しているものなのかに自覚的になることが求められているように思う。ただし、そうした気づきを持つ知性を育むことはとても難しく、どうすればそうした知性が育まれるのかについて昨晚考えていた。言い換えると、どのような条件下で、人々がこれまで無自覚であった文脈や世界観に気づくことが可能かについて考えていたのである。この点についてはまだ良い案が浮かばないというのが正直なところだが、数日前の日記で書き留めていたように、ビル・トールバートのモデルで言えば「専門家段階(エキスパート)」と形容されるような専門性とはまるっきり異なる次元まで、自らの探究や実践を突き詰めていくことは一つ重要になるだろう。

この時、「突き詰めていく」というのは、その領域の知識と技術を高度に養うことではなく、幾分皮肉なことかもしれないが、その領域に対して冷めてしまうほどまで探究と実践を徹底して行うということである。思うに、専門家段階の探究と実践は、そうした点においてとてもぬるいものだと思う。彼らが

---

自己の専門性から外に出ていくことができないのは、自らの領域に冷める——ないしは醒める——ことができるほどに探究や実践をしていないからのように思えてくる。

数日前の日記で書き留めているように、私自身が伝統的な科学研究に対して感じた冷めは、まさにそのようなプロセスで起こったように思う。伝統的な科学研究でなされていることが、実はある特定の世界観の元に奇妙な形で成立していることに気づいたのである。その奇妙さは、伝統的な科学研究では決して語られぬことがあるという気づきとなって現れ、伝統的な科学の世界で語られぬことこそが、自分が大切にしたいと思っていることだということに気づかされたのは、遅まきながら去年のことだったように思う。

だがこれも、実際に伝統的な科学研究を徹底して行うということなしには気づき得なかったことだと考えている。そうした気づきが生まれて以降、なにも科学研究の価値を蔑ろにするわけではなく、むしろそうした価値がいかような文脈・世界観・条件のもとに成り立つのかに自覚的になる形で接することが可能になり始めている。

これと似たようなことが、今後は作曲実践や音楽理論の探究に対しても起こるかもしれない。おそらくそれが起きてからが、本当の意味で自分の創造活動が始まるのだと思う。そこまでは、とにかく徹底的に当該領域の探究と実践を進めていく必要があるだろう。フローニンゲン:2019/1/6(日)

08:06

#### No.1545: A Lingering Scent of Solace

Now I realized that today was Sunday. I'll begin evening work from now, being embraced by a lingering scent of solace. Groningen, 16:01, Sunday, 1/6/2019